

〈論 文〉

副詞「より」の使用環境について  
—比較基準非顕在の文を中心に—

帰 翔<sup>1</sup> (東京外国語大学大学院博士後期課程)

Syntactic Features in The Usage of The Adverb *yor*i  
Focusing on sentences without explicit referent

Gui, Xiang (Doctoral Course, Tokyo University of Foreign Studies)

キーワード: 「より」、比較基準、モダリティ、複文、非現実

**Key words:** *yor*i, referent, modality, compound sentence, irreality

**要旨:** 程度副詞「より」は、通常「もっと」「ずっと」と同様に、「X は Y に比べてより A」のように比較基準を表す成分との共起を要求する。本稿は実例調査に基づき、次の三つの場合では比較基準が顕在しなくても文が成立することを主張する: i. 比較基準が主文述語の表す語彙的な意味によって含意される、ii. 比較基準が文のモーダルな意味によって含意される、iii. 比較基準が構文的な意味によって含意される。

**Abstract:** The purpose of this study is to investigate syntactic features in the usage of adverb *yor*i. *Yori* is usually considered to be used in the comparison structure *X wa Y ni kurabete \_\_\_\_ A da* where a referent must be explicit. However, in some cases, *yor*i is observed to appear in implicit comparison structures where the referent does not appear explicitly. In accordance with the observation in this paper, three different situations are observed in the usage of *yor*i: i. the referent is implied by the lexical meaning of the verb, ii. The referent is implied by the modal meaning of the sentence, iii. The referent is implied by the meaning of the complex sentence.

原稿受理日 (2017-10-02)

査読後掲載決定日 (2017-11-07)

日本研究教育年報. 2018, Vol.22, pp1-16. ISSN 2433-8923



<sup>1</sup> 本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC BY) 下に提供します。 <https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

## 1. はじめに

いわゆる程度副詞には主に、比較の場面に使われるものがある。この種の副詞は意味的に二つ以上の事物が比較され、一方の程度が他方より上回ることを表す。本稿の考察対象「より」のほかには、「もっと」「ずっと」「さらに」「遥かに」「一層」などが同種のものと考えられる（以下、「比較の程度副詞」と呼ぶ）。

比較の程度副詞は（1）のように、文中で比較基準を表す成分と共起する。また、（2）のように、比較基準が文中に現れず、先行文脈に出現する場合も容認される。

- (1) 太郎は次郎に比べて{より／もっと／ずっと／さらに／遥かに／一層}素直だ。  
(2) 次郎は素直だ。太郎は{より／もっと／ずっと／さらに／遥かに／一層}素直だ。

一方、比較基準を表す成分が欠けると、比較の程度副詞の使用が容認されなくなる。その点が、「とても」「非常に」「かなり」「ずいぶん」などの程度副詞と異なっている。

- (1') ??太郎は{より／もっと／ずっと／さらに／遥かに／一層}素直だ。  
cf. 太郎は{とても／非常に／かなり／ずいぶん}素直だ。

しかし、比較基準を表す成分の文中における顕在は、比較の程度副詞の使用上の必須条件ではない。前掲（2）のような、比較基準が先行文脈にある場合を除いても、ある環境においては比較基準が文中に現れなくても文が成立する<sup>2</sup>。

- (3) a 状況がより悪化した。  
b より住みやすい町を作っている。  
c より努力しなさい。

本稿は、（3）のような現象をめぐって、程度副詞「より」が出現し得る文環境の特徴、特に比較基準が顕在しない文でそれが容認される条件について、実例に基づき考察する。

## 2. 先行研究

### 2.1. 比較の程度副詞の出現環境

まず、比較の程度副詞の出現環境について諸研究における指摘を整理する。

程度副詞の体系化を試みた渡辺（1990）では、「XはYより——Aだ」という構文テストを用いて程度副詞を大きく「比較系」（「もっと」「ずっと」）と「計量系」（後に「発見系」。「とても」など）とに分類している。前者の「比較系」に属する副詞について、比較基準を表す成分と共起可能な点で、「計量系」程度副詞と根本的に異なる、と示唆している。

<sup>2</sup> （3）は実例に基づいた作例である。

しかし、二つの対象を比較する際に、双方が常に文中に明示されているとは限らない。工藤（1983）は、文に出現した事象の状態と他の時点における状態との対比も十分考えられることを示唆し、「前より\_\_\_\_大きくなる／冷える／離れる」のように、他の時点の状態を表す状態変化動詞（句）に比較の程度副詞との共起例が多いことを指摘している。工藤（1983）の指摘から、状態変化の動詞と共起するときには、比較の程度副詞の使用が容認されやすいことが窺える。

また、異なる時点に存在する事態同士を比較するとき、発話時「現在」の事態と「未来」の事態との間で比較の意味関係が成立し得る。この点を示唆しているのは工藤（1983）、林（1997）である。林（1997）は、命令・依頼・勧誘・意志を表すモダリティ形式と程度副詞との共起現象を考察している。例えば、命令文の発話においては、命令形述語動詞の表す未実現事態は発話時の状況と比較することが可能であり、さらにそれゆえ、「もっと〇〇しろ」という表現が容認されるのだ、と述べている。工藤（1983）と林（1997）で指摘されたこの現象に対して、高水（2003）は事実（realis）と非事実（irrealis）との対立を導入し、比較の程度副詞が使われた文の文末に評価のモダリティ形式、命令・依頼・意志などの表現類型のモダリティが見られる現象に共通の解釈を与えている。すなわち、話し手にとっての既存の事態（事実）が比較基準となり、比較の程度副詞の修飾するモダリティ形式付きの文内容（非事実）が比較主体となり、両者の間に比較関係が成立し、それゆえ比較基準が明示されなくても文が容認される、と言うのである。

## 2.2. 「より」の容認性をめぐる安達（2001）説

本稿が扱う「より」に限定してその容認問題に言及しているのが安達（2001）である。安達（2001）は、「より」を含む文の成立に「何らかの手段で比較の意味が含意される必要がある」（p.15）と指摘し、具体的には（a）構文環境による含意、（b）述語の語彙的な意味による含意を提示している。このうち、（a）は例文（1）（2）で示したような文中、或いは先行文脈に比較基準が顕在する場合である。ここでは（b）の指摘に注目する。

（4） より興味深い論文を図書館で見つけた。（安達 2001：15）

（5） a ??よりおいしいケーキを食べている。

      b よりおいしいケーキを探している。（安達 2001：15）

安達（2001）は（4）について「主文述語の語彙的な意味などの助けを借りて比較の意味を付け加える」（p.15）と述べている。また、（5）に示されているように、同じ「V テイル」形式であっても、動詞の違いによって副詞「より」の容認性が異なることを指摘して主張を補強する。比較の意味を含意しうる動詞の語彙的な意味として、安達（2001）は①「主体の漸次的な変化」、②「発見」、③「実現」、④「変化<sup>3</sup>」の四種類を提示している<sup>4</sup>。

<sup>3</sup> 客体の状態の漸次的な変化を言う。

- (6) a 状況が好転する兆しはまったくなく、より悪化していてもおかしくないような状態だった。(「主体の漸次的な変化」に相当)
- b より有利な組み方を求めて頭を振るたびに、重く鈍い音が客席まで響いてくる。(「発見」に相当)
- c 与野党がせめぎ合い、競い合って、人々の前で、よりよい政治を実現する。(「実現」に相当)
- d とくにオペラの場合は、幕あいの一杯の酒がより華やかな気分をもり上げてくれる。(「(客体の状態の漸次的) 変化」に相当)

(安達 2001、pp15-16 より)

ただし、安達(2001)は、顕在しない比較基準を含意する述語の語彙的意味の提示にとどまり、他の諸研究で取り上げられた特定モダリティとの共起という条件については言及していない。

### 3. 調査方法

比較基準が顕在しない場合を網羅的に調査するため、大容量コーパスによる実例調査を行った。具体的には、国立国語研究所現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ<sup>5</sup>から、検索アプリケーション「中納言」を利用して、副詞「より」を検索し<sup>6</sup>、全 9774 例からランダムに 1000 例を抽出し、動詞「よる」の連用形、格助詞「より」などを排除した 930 例を考察対象とした。本稿は操作的に、キーの「より」から前後約 150 文字以内に比較基準にあたる表現が現れているか否かをまず確認した。

その結果、比較基準が文中にも、文脈にも現れないものが 529 例ある。母語話者の内省では比較基準を要求するとされる「より」の実例のうち、このような例が半数以上を占め

<sup>4</sup> 安達 (pp.15-16) より要約

<sup>5</sup> 国立国語研究所開発したコーパスである。書籍・雑誌・新聞・白書・ブログ・ネット掲示板・教科書・法律などのジャンルにまたがり、各ジャンルから無作為に抽出が行われている。現在は 1 億 430 万語収録しているという。

(国立国語研究所コーパス開発センターホームページより url: [http://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/bccwj/](http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/))

<sup>6</sup> 具体的な検索条件情報は次の通りである

キー: (語彙素="より" AND 品詞 LIKE "副詞%")

```
IN ((registerName="出版・新聞" AND (core="true" OR core="false"))) OR (registerName="出版・雑誌" AND (core="true" OR core="false"))) OR (registerName="出版・書籍" AND (core="true" OR core="false"))) OR (registerName="図書館・書籍" AND core="false") OR (registerName="特定目的・白書" AND (core="true" OR core="false"))) OR (registerName="特定目的・ベストセラー" AND core="false") OR (registerName="特定目的・法律" AND core="false") OR (registerName="特定目的・国会会議録" AND core="false") OR (registerName="特定目的・広報誌" AND core="false") OR (registerName="特定目的・教科書" AND core="false") OR (registerName="特定目的・韻文" AND core="false"))
```

```
WITH OPTIONS tglKugiri="" AND tglBunKugiri="#" AND limitToSelfSentence="1" AND tglFixVariable="2" AND tglWords="300" AND unit="1" AND encoding="UTF-16LE" AND endOfLine="CRLF"
```

(現代日本語書き言葉均衡コーパス (通常版) BCCWJ-NT より)

るという結果は、これら比較基準非顕在の例を分析することの必要性を示唆している。

#### 4. 考察

考察の結果比較基準が顕在しない条件には3種類あると考えられる。

- i 比較基準が主文述語の表す語彙的な意味によって含意される (295 例)。
- ii 比較基準が文のモーダルな意味によって含意される (139 例)。
- iii 比較基準が構文的な意味によって含意される (174 例)。

単純に合計すると、529 例を超えるが、それは i の条件と ii の条件、或いは ii の条件と iii の条件を同時に満たすという場合が存在するためである。

##### 4.1. 述語の語彙的な意味による含意

まず、条件 i について述べる。これは、1.2 で検討した安達 (2001) が指摘したものである。以下、語彙的な意味を 5 つに分類して示すが、これは結果として、安達 (2001) の分類のうち、①「主体の漸次的変化」④「変化」から、【位置変化】を表すものを別立てしたものであると言える。

##### 4.1.1. 【主体程度変化】

【主体程度変化】は、動作主が持っている性質状態の程度が時間の進展と共に変化していく、という意味である。安達 (2001) の①「主体の漸次的変化」に相当する。条件 i をみたす例のうち、最も用例数の多いのはこのタイプである。

調査した用例においては、【主体程度変化】の意味を持つ語彙は基本的に自動詞であるが、運動性名詞のうち、あるモノの程度変化を表すものもある。

なる (92)	高度化する (2)	分かる	向上 (を遂げる)
高まる (5)	成長する (2)	悪化する	上昇傾向 (を示す)
アップする (3)	すっきりする	一体化する	進展 (が見られる)
向上する (3)	栄える	高層化する	明確化 (を図る)
上がる (2)	富む	収斂する	
変わる (2)	はっきりする	進化する	
深まる (2)	増す	増大する	

- (7) 大手量販店のみならず中・小規模量販店間（生協店舗含む）の競合が錯綜し競争構造がより複雑になるとともに、カテゴリーキラーの影響も出始め、真の商品企画力・管理能力が営業成績に直結する事態を迎えているのが量販店競争の現況といえる。（フードシステムの構造変化と農漁業）
- (8) 近年、都市機能の効率化が進められ、建築物がより高層化し大規模化する傾向にある。（消防白書）

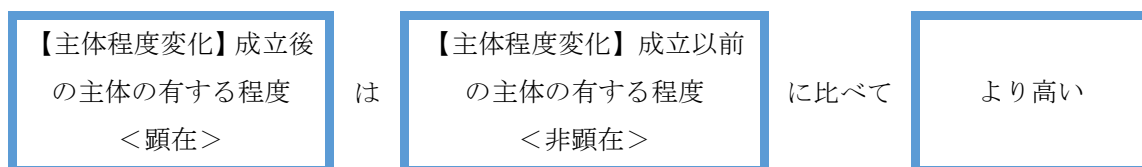
【主体程度変化】を表す語彙で最も用例数の多いのは(7)の「なる」である。また、(8)における「高層化する」のように、変化を表す接尾辞「～化」が付いた漢語動詞が多く見られる。この二つの述語動詞は、いずれも変化を表す。具体的に言えば、主体の有するある側面の状態の程度が変化するのである。この場合、変化が成立する以前の主体の程度が、比較基準として考えられる。これは変化を表す述語動詞に含意され、それゆえ、比較基準が文中に必ずしも明示されなくても副詞「より」が容認され得るのである。

ここまで分析してきた用例は安達（2001）の指摘と対応している。一方、本稿の考察では、次のような、変化という動的事態を描写する名詞の例も見られた。

- (9) 民間レベルでも日・ア経済合同委員会等交流が盛んで、両国間の伝統的友好関係により一層の進展が見られる。（我が国の政府開発援助）

(9) が示しているように、副詞「より」が動的事態を表す名詞「進展」の連体修飾成分に含まれている。文述部の「進展が見られる」は「進展する」の意味を表している。この場合も(7)(8)と同様に、動的事態の成立前後に程度変化の発生が考えられる。

上記の各例が示しているように、副詞「より」が主体の程度変化を表す動詞と共起する場合、或いは「より一層の」などの連体修飾形式で運動性名詞を修飾する場合、程度変化が発生する前後の状態は比較関係になり得る。したがって、「本来の程度に比べて」、などの表現を必ずしも明示する必要がない。副詞「より」と【主体程度変化】を意味する述語とが共起する場合の比較の構造は、次のようにまとめられる。



#### 4.1.2. 【対象程度変化】

【対象程度変化】とは比較主体の持つ性質状態を対象として、その程度を変化させることである。安達（2001）の④にはほぼ相当する。この種の事態を表す語彙は、【主体程度変化】を表す語彙とは対照的に、他動詞がほとんどである。

する (52)	高める (3)	深める	実質化する
強化する (5)	徹底する (2)	改善する	充実する
推進する (4)	変える	拡充する	促進する
促す (3)	強める	緊密化する	充実強化 (を図る)
進める (3)	広める	効率化する	

この種の語彙的意味を表す語では、最も用例数の多いものは動詞「する」である。

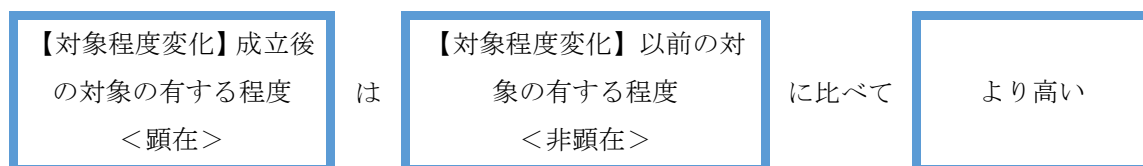
- (10) 遠隔医療はまた、健康な人をより健康にする取り組みに貢献できます。(最新医療のはなし)
- (11) スロットルサーボをメカデッキ下に寝かせて設置、より一層重心を低くして、マシンの安定性を向上させている。(ラジコンマガジン)

(10) (11) は「NP をより A にする」の形式であり、目的語位置にある対象を「より A である」ように作用することを表している。「NP をより A にする」の実現によって、目的語名詞句の程度が変化するという結果が生じ、変化が発生する前後の程度が異なる。この場合、対象の程度変化が発生する前の状態（「元比べて」、「本来の状態よりも」などの表現）を比較基準として補うことが想定できる。

前掲した【主体程度変化】を表す語には、接尾辞「～化」を伴った漢語動詞が観察されているが、この種の動詞に他動詞用法を持つものも存在する。次の例が示すように、述語「効率化する」が対象の有する程度を変化させることを表す。

- (12) 事業団の調査事業でございますけれども、探査技術をより効率化するということで、国内外の探査事業の効率化また民間の探鉱リスクの低減に努めております。(国会会議録)

これら【対象程度変化】を表すものは、基本的に【主体程度変化】を表すものと同じように解釈できる。すなわち、副詞「より」が【対象程度変化】を表す動詞などと共起する場合、述語動詞の表す行為の実現前後における対象の状態の間に比較関係が生じ得るのである。この場合の比較の構造は、次のようにまとめられる。



#### 4.1.3. 【生産・実現】

これらは、本来存在していなかった事物が動作の実現によって、存在するようになるという意味である。安達（2001）の③に相当する。事態実現の結果として、具体的なものが出現するか、抽象的な出来事が発生するかによって、大きく【生産】と【実現】に分けることができるが、二者の間に厳密な線を引くことができず、連続しているものと考えられる。この種の意味を表す語彙の多くは他動詞であるが、一部「浮かび上がる」のような出現を表す自動詞もこのなかに含む。また生産を表す動作性名詞の例もある。

提供する (4)	創り出す	完成する	整備する
作る (3)	努める	企画する	編成する
確保する (3)	引き出す	形成する	鶴見づくり (を進める)
築く (2)	設ける	構築する	まちづくり (を進める)
生み出す (2)	養う	出品する	実現 (に向ける)
実現する (2)	沸かす	生ずる	形成 (に貢献する)
浮かび上がる	開発する	制作する	

まず、動詞述語の例を見ていく。次の例において、「より」の程度修飾を受けている性質状態の持ち主を表す名詞句は、「日、中、韓の密接な関係」「豊かな番組」である。前者は抽象物の創造であり、後者は具体物の生産である。

- (13) 韓国外務省高官は「まったくばかげた説」と一蹴し、「将来は日、中、韓のより密接な関係をつくる布石ともなりうる」とその意義を強調する。(出冷戦記)
- (14) NHKにおいては、進展する放送技術を駆使して、創造的でより豊かな番組を制作していくとともに、効率的な事業運営を図るため、積極的に職員の能力開発、技術向上に努めることが求められる。(通信白書)

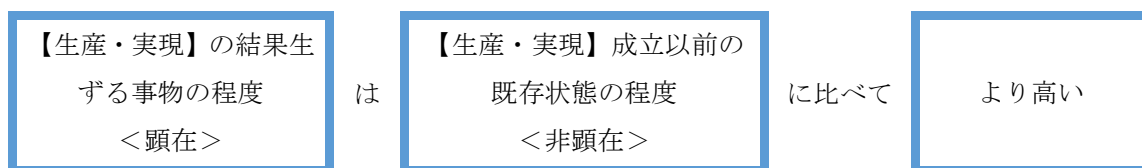
(14) の文を例として説明すると、【生産】の動詞「制作する」の実現によって「創造的でより豊かな番組」が結果として出現すると考えられる。事態「制作スル」ことが達成するまでは、「創造的でより豊かな番組が存在する」という事態は未実現であると言えよう。この場合、未実現の対象が持っている程度と比較できるのは、既に実現されている事態の程度が考えられる。

また、今回の調査では、生産を意味する動作性名詞を含む述語も見られた。それは、動詞「作る」の連用形「づくり」が濁音化して、「～づくり」が付いた複合語である。この場合、「～づくり」の前の部分は意味的に生産対象と考えられる。



- (15) 「鶴見まちづくり推進会議」はクリーンキャンペーン（区内の企業・団体が行う清掃活動の支援）や区民大会の開催等様々な活動を行っています。この活動を支援し、より魅力ある鶴見づくりを進めます。(広報よこはま鶴見区版)

副詞「より」が【生産・実現】を表す語と共起するとき、「より」の修飾を受けている状態の持ち主は生産物、あるいは実現対象である。いずれも本来存在していなかった事物が存在するようになるということは、一種の変化過程であると言える。既に見てきた【主体程度変化】【対象程度変化】と同様、事物が出現するまでの既存状態が比較基準として含意されると考えられる。この場合、比較の構造は次のようにまとめられる。



#### 4.1.4. 【期待】

【期待】とは、まだ成立していない事態が成立するように、あるいはまだ入手されていないものを入手するように追い求める行為を指す。安達（2001）の言う②「発見」にほぼ相当する。この種の語彙的意味を表すものには、「求める」、「期待する」、「目指す」のような人間の心理活動を表すもののほか、安達(2001)が提示した「発見」を意味する「見つける」もこの種の意味に含む。

求める (22)	見つける	要求する
期待する (4)	狙う	要請する
目指す (3)	志向する	

次の例が示すように、副詞「より」は名詞句「よりよい漁場」の内部に出現している。名詞句全体が【期待】の動詞述語の目的語にあたり、意味的にはまだ入手していない、ないしまだ実現していない対象を指している。

- (16) 第一章で述べたとおり、彼らの一部はよりよい漁場を求めて帆を張り、櫓をこいで浜から浜へとまるで蜜を求めるハチのように移動した。(豪快につぼん漁師料理)

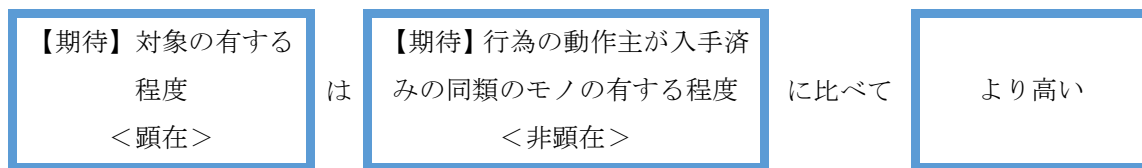
【期待】の行為が成立している時点において、期待内容で表されている程度はまだ実現していない。この場合、動作「求める」の成立以前に動作主が既に入手している同類のモノの事態が比較の基準になるのである。上記（16）の文には「すでにある漁場に比べて」などの表現を比較基準として文中に補うことが考えられる。

本稿で言う【期待】は安達(2001)で提示された「発見」の意味に相当するが、実例を考察すると、「期待」と「発見」の意味的な近接性を示している用例が見られる。

- (17) しかし、州兵軍のSF兵士のポストに見合う候補者の数が足りない。これはつまり、米陸軍が魅力ある州兵軍の地位さえも満たすのに苦勞していることを意味する。より多くのSF兵士を見つけるという問題に対し、簡単な答えは見つからないのだ。(素顔のスペシャル・フォース)

上記の文では、名詞句「より多くのSF兵士」が動詞「見つける」の目的語である。この例文では、「良い多くのSF兵士を見つける」ことは実現しておらず、事実上「より多くのSF兵士を募集する／求める」に相当すると言える。

このように、副詞「より」が【期待】を表す述語と共起する場合、程度修飾を受けている状態の持ち主は期待の対象であり、既に動作主の入手している同類のモノが比較の基準であると言える。動作主が何か同類のモノを獲得済みであることは往々にして背景的な知識となり、比較基準が明示されなくても文の容認度に大きな影響を与えない。以上の場合の比較の構造をまとめれば、次のようになる。



#### 4.1.5. 【位置変化】

【位置変化】は、動作主体が一つの位置から別の位置へと移動したり、一つの方向から別の方向へと切り替わる動的な場面を指す。今回の調査では副詞「より」と共起する【位置変化】を表す語は基本的に自動詞であるが、対象の所在位置を変化させるという意味の他動詞も見られる。

近づける (3)	移す	移転する
入る (2)	向かう	
導く (2)	向く	

【位置変化】の動詞述語と共起する場合、副詞「より」は位置変化の目的地にあたる名詞句のなかに含まれる。

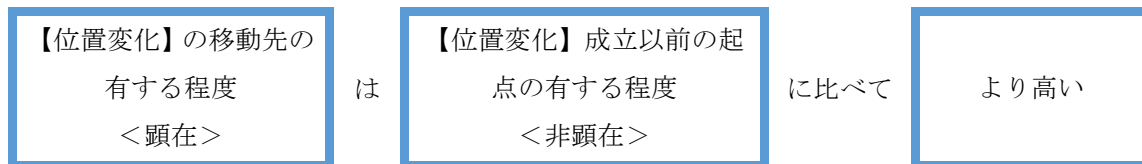
- (18) その意味では、生徒に対する遅刻指導にかぎらず、生徒の問題行動をよりよい方向へ導くには、教師自身も自らを反省し、そういう生徒たちとともに成長しようとする謙

虚な姿勢がその基本になくてはならない。(生徒指導法を学ぶ)

(19) 超音波は筋肉や他の軟部組織内のより深い部分へ浸透するため、最も効果的な深部温熱療法である。(リハビリテーション医学 Q&A)

これらの例では、「従来の位置」、「元の世界」などカラ格補語、ヲ格補語になり得る表現が省略されていると言える。位置変化の起点と終点は比較関係を構成できる。元の文には「従来の位置に比べて」や「元の世界より」のような、移動前の位置を比較基準とする語句を補うことができる。

位置変化の達成に伴い、移動物の存在場所の性質状態が変わることになる。それゆえ、程度変化として捉えることも可能であろう。そのため、位置変化の動作が含意する起点「NP<sub>1</sub>(から)」と終点「NP<sub>2</sub>(に／へ)」という二つの項の間で比較の意味関係が成立するのである。以上の比較構造をまとめると、次のようになる。



#### 4.2. 文のモーダルな意味による含意

次に、条件 ii について述べる。これは高水（2003）ほかが指摘したものである。以下、文末モダリティ形式の表す意味によって、二種類に分けて叙述する。

##### 4.2.1. 「より」と当為・評価のモダリティ形式との共起

当為・評価のモダリティとは、命題事態の必要性和許容性に関する話し手の評価を表す文法形式である。評価のモダリティを表す形式には次のようなものがある<sup>7</sup>。

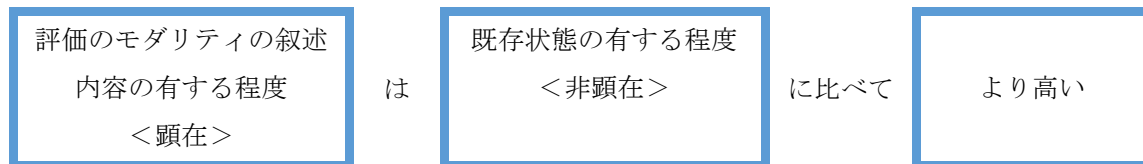
- ① 「必要」：ばいい／ほうがいい／べきだ／なければならない／する必要がある／  
するしかない／ものだ／ことだ
- ② 「不必要」：なくてもいい／する必要がない／することはない／するまでもない
- ③ 「許容」：でもいい
- ④ 「非許容」：てはいけない／わけにはいかない

今回の調査では、「より」と共起するものは上記①「必要」を表す形式に集中している。

<sup>7</sup>高梨(2014)より要約

- (20) したがって、情報公開制度の側では、どのような個人情報为非公開になるのかを、「知る権利」と同時にプライバシー保護の要請があることを前提にして、より厳密に定めておく必要があるのです。(よくわかる情報公開制度)
- (21) 調査地域の特性を理解する手がかりを景観や来街者の姿から得られることも、現地調査の効用に数えられる。一方、調査地域を選定する段階では既存の情報をより活用すべきである。(教育 GIS の理論と実践)

ここで重要なのは、副詞「より」の程度修飾を受けている事態が、実現が要請されている事態であり、現実世界で実現済みの事態ではないということである。要するに、副詞「より」が修飾している事態は非現実である。この場合、高水（2003）の指摘にある通り、現実の状況が比較基準となると考えられる。この場合の比較構造をまとめると、次のようになる。



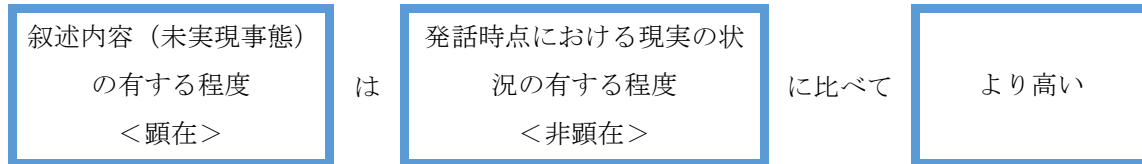
#### 4.2.2. 「より」と意志・命令・依頼・願望のモダリティ形式との共起

次に、未実現の事態が実現するように働きかけるというモーダルな意味を持つ文法形式と「より」との共起現象について述べる。これらの共起現象は、次の諸例が示しているように、いわゆる意志・命令・依頼・願望という意味を表すものである。

- (22) 沖縄におきましても、先般の甘味資源審議会の建議にもございましたけれども、基盤整備や機械化の推進その他を通じて生産性の向上により一層の努力をしていただきたいというぐあいに思っております。(国会会議録)
- (23) よりすばやく選択、判断することを心がけてください。(麻雀力検定 140)
- (24) こう語る時、彼は若い頃を思い出していたにちがいないが、苦しい時こそ、より積極的になれ、前進あるのみと自分を励ませ、との教訓である。(日本の経済の礎を創った男たちの言葉)
- (25) 奈落のその底から、しかし、和田さんは這い上った。「与えられた環境でよりよく生きよう」という哲学で。(打たれ強く生きる)
- (26) 先生のおっしゃいますことはよくわかりますので、勧告の制度をより積極的に活用してまいりたいと思っております。(国会会議録)

副詞「より」と共起する述語がこれらの文法形式を伴う場合、程度修飾を受けている内容は非現実の事態である。この場合、高水（2003）が指摘した通り、発話時における現実

世界の状況の程度との間に比較関係が成立し得る。この場合の比較構造をまとめると、次のようになる。



#### 4.3. 構文的意味による含意

最後に条件Ⅲについて述べる。これは、「より」が非現実事態を表す構文に現れる場合である。このタイプの存在は従来明確に指摘されていなかった。今回の調査では、目的節と条件文の二つの場合があった。

##### 4.3.1. 「より」が目的節に出現する場合

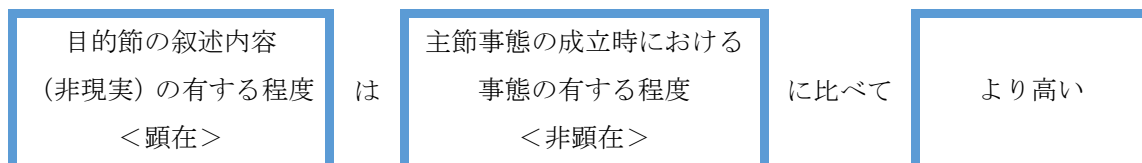
まず、「より」が目的節の内部に出現する場合について見ていく。

目的節の表す事態は、その意味上、時間的に主節事態の後に実現する事態である。かつそれは主節動作主が、実現を期待している事態と言える。

- (27) また、より速やかに申告相談を行うために、次の点について、申告相談に来られる際の準備をお願いします。(広報やかげ)
- (28) 区は、高齢期を迎えた方が、より健康でいきいきと暮らせるように、「いきいき健康券」を交付しています。(ねりま区報)

上の文は意味的について、程度修飾を受けている目的節の事態「速やかに申告相談を行うために」、「健康でいきいきと暮らせる」は時間的に主節の事態の後に発生するものであって、かつ主節動作主がその実現を期待する種類のものである。その意味で、3.1.で触れた【生産・実現】【期待】のタイプと類似した意味構造が認められる。すなわち、主節事態の出来事が成立する時点における状況が比較基準になり、目的節の表す事態が比較主体となる、という意味関係が含意されるのである。

この場合の比較構造は、次のようにまとめられる。



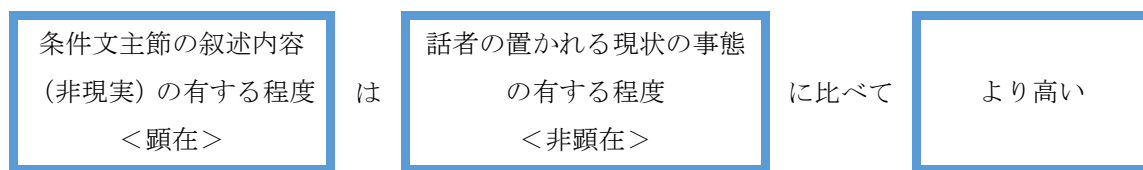
#### 4.3.2. 「より」が条件文に出現する場合

今回の調査では、「より」が条件文という構文環境に出現するとき、比較基準が文中ないしは文脈に顕在しなくても文が成立する例が見られた。まず、「より」が条件文の主節に出現する場合を見ていく。

- (29) 魅力ある生活環境をつくるためには、供給者の側の競争を激しくすることによって、消費者の側に選べる自由を与えることが重要だ。そうすれば医院も病院も多様になり、コストが下がり、よりよい医療ができるはずである。(「次」はこうなる)
- (30) 現在から見れば、きわめて貴重な生きた伝承資料が存在するその段階で十分な初誕生儀礼に関する考察がなされておれば、より充実した研究成果が期待できたであろうと思われるが、所詮は無いものねだりなのかも知れない。(「鬼子」と誕生餅)

条件文とは、従属節の事態の実現が主節事態の実現を引き起こすという因果関係を表す構文である。条件を表す構文にはいくつかの下位類が存在するが、ここで重要なのは、上の二文はいずれも仮定の因果関係を述べる仮定条件文である。言い換えれば、上の二例における主節内容はいずれも非現実の事態である。「はず」、「だろう」のついた表現がその標識である。条件文の主節は、条件2と異なり、必ずしも話者が実現を要請するものではないけれども、話者がある条件での実現を予測しているものである。

ここにおいて、高水（2003）の指摘を拡張し適用する。すなわち、「より」が修飾する主節事態が比較主体となり、話者の置かれた現状が比較基準と位置付けられ、両者の間の比較関係が含意されると考えるのである。以上の比較の構造を図示すれば、次のようにまとめられる。

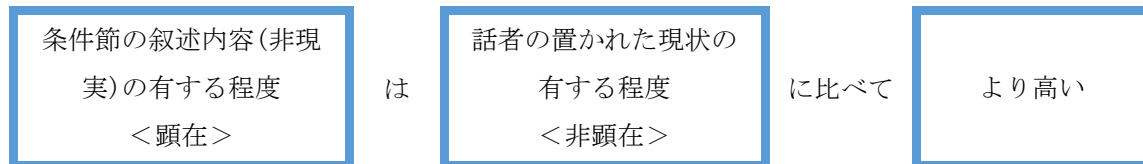


一方、「より」が条件節内に出現する例もある。この場合も、比較基準が文中にも文脈にも出現していない。

- (31) 生徒がより多くの情報を集めることができれば、利用できる解決策を見つけやすくなる。(国際競争力を高めるアメリカの教育戦略)
- (32) 市場で売買される商品は、生産者にとってはより高い価格で販売されうるのであれば、そして、消費者にとってはより安い価格で購入されうるのであれば、容易に国境を越えて取引されうる。(EU 研究の新地平)



条件節の表す事態は、話者が仮に設定した事態であり、定義的に非現実の事態である。この場合、条件に関する高水（2003）の指摘と同様、条件節の事態が比較主体となり、話者の置かれた現状の状況が比較基準となり、両者の間に比較関係が生じ得るものと考えられる。すなわち、次のような比較の構造が存在すると考えられる。



## 5. まとめ

本稿は副詞「より」の実例を対象にして、比較基準を表す成分が文中にも文脈にも現れていないものを考察した。その結果、i 述語の語彙的な意味による含意、ii 文のモーダルな意味による含意、iii 構文的な意味による含意、の三つの場合が見られた。

それぞれの条件を構成する文環境要素には、いくつかの異なる形式が見られるが、互いに同じ原理で比較の構造を支えるものがある。例えば、i 述語の語彙的な意味による含意の場合の場合、【主体程度変化】、【対象程度変化】、【位置変化】の三者は共通して【程度の変化】を意味している。【生産・実現】と【期待】の二者は、共に本来なかったもの、成立していないことの出現と関わっている。この点においては、条件 ii、及び iii との共通性が見て取れる。

以上まとめると、次の通りである。

- (a) 文述語が表す事態に程度変化を表す側面が含意される文環境では、変化前の状態が常に存在すると考えられる。
- (b) 「より」の修飾する事態が非現実の事態であるとき、発話時に背景化されている既存事態の程度が比較構造に関与する。

## 参考文献

- 安達太郎(2001)「比較構文の全体像」『広島女子大学国際文化学部紀要』第9号、広島女子大学、pp.1-19
- 工藤浩(1983)「程度副詞をめぐって」 渡辺実編『副用語の研究』明治書院、pp.178-198
- 高梨信乃（2014）「デオンティック・モダリティ」日本語文法学会編『日本語文法事典』大修館書店、pp.417-418
- 高水徹(2003)「比較副詞の容認可能性と文脈」『言語科学論集』9、京都大学大学院人間・環境学研究科言語科学講座、pp.137-149
- 日本語記述文法研究会(2003)『現代日本語文法 4 モダリティ』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会(2003)『現代日本語文法 6 複文』くろしお出版

- 林奈緒子(1997)「程度副詞と命令のモダリティ」『日本語と日本文学』25, 筑波大学国語国文学会, pp.1-10.
- 前田直子(1995)「スルタメ(ニ)、スルヨウ(ニ)、シニ、スルノニ—目的を表す表現—」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(下)複文・連文編』くろしお出版, pp.451-459
- 前田直子(2006)「連用形派生の目的節について—「べく」と「よう(に)」を中心に—」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編『日本語文法の新地平 3 複文・談話編』くろしお出版, pp.49-64
- 渡辺実(1990)「程度副詞の体系」『国文学論集』23, 上智大学国文学会 pp.1-16 [再録: 渡辺実(2002)『国語意味論』塙書房, pp.298-313]

#### 用例出典

国立国語研究所 現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ

[http://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/bccwj/](http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/) (最終閲覧日: 2017 年 1 月 5 日)